

## 令和2年度卒業式の学長式辞

石本 勝見

### はじめに

この度の式辞では、コロナ感染症で卒業式も入学式もできなかったこれまでの経験を踏まえて、こうした経験の意味について、否定的な側面のみならず肯定的な面もあるのではないかと語った。また、良い保育者として育ててほしい、という願いを込めて本学の教育目標の意義について話した。良き社会人としての生き方については日ごろから折に触れて伝えていることではあるが共に well being に生きてほしいと願い触れた。

なお、学長としての式辞は今回が最後となった。

### 式 辞

厳しい冬を耐えた越路の大地に新しい春の光射して、生命の躍動せんとする息吹が感じられる弥生の、今日の良き日に、令和2年度第39回新潟中央短期大学卒業証書・学位記授与式を挙げるに当たり、加茂市長藤田明美様、本学保護者会長川崎久美子様から御臨席をいただき、誠にありがとうございます。

ただいま卒業証書・学位記を授与された皆さん、卒業おめでとう。ここからお祝いを申し上げます。

また、ご家族・保護者の皆様、本日は誠にありがとうございます。また、これまでの本学に対する温かい御理解と御支援に対しましても深く感謝申し上げます。

さて、世界中がコロナ感染症の対応に苦慮していますが、本学も大変な一年でした。その大変さは予測不可能な状況でどう行動すべきか？ということではないかと思えます。

当たり前に登校して自分が選択した授業を受ける、あるいは予定されている実習などの教育活動に参加するという事などが急にできなくなった。そしてさらに厄介なことは、いつになったら終息し、前のような状態に戻れるのか、まったく見通せない、いつまで我慢すればいいのかわからないということです。

しかし我々は、こうした状況で、今何ができるのか、慎重に状況を見極めながら可

能なやり方、これならできるというやり方を工夫し教育活動を続けてまいりました。学生の皆さんにも慣れない遠隔授業等ですいぶんご苦勞を掛けましたが協力してもらい何とかやってきました。それぞれの大学で事情は異なるので一概には言えませんが、それでも私どもは全国の大学の中ではかなり早く対面授業を開始したと思います。

さて、こうした苦しい経験を通じて我々は何を学んだのでしょうか？私なりに考えてみますと、人生には予定通りにはいかない行かない場合がある、しかも突然にやってくることもある、そうした時にどう行動すべきか、ということを経験したといえるのではないかと、思っています。前例がない、進むべき道が見えないときにどうしたらいいか？

今回学んだことは、自分として、我々として慎重に検討しながら、「今できること」をする、ということだろうと思います。その道を手探りで進む、ということは、もちろん絶対的な自信があるわけではないのですが、この道を行けば光が見えるはずだ、という未来に対する希望が必要ではないかと思えます。私がいつも申し上げていることですが、人生において、悲観より楽観が若干でも上回る方がいいと思えます。

どうか皆さん、これからの人生でこうした予測不可能な状況に直面することが、必ずと言っていいですが、あるだろうと思えます。そうした時に今回の経験を役立ててほしい、と思えます。

そして、この二年間の学びの中で皆さんが最も大事にしてきたことは、入学の時に抱いていた、良い保育者になるために必要な力や態度を身に着ける、ということではないかと思えます。これからの現実を思うとき、喜びと同時に不安や心配もあろうかと思えます。

しかし、勇気を出して踏み出してほしいと思えます。最初から、一年目から、自らが思い描く、あるいは周囲が期待するような保育者になれるわけがない。

ここで本学の教育目標を思い出してほしいと思えます。子どものために 子どもと共に 学びつづける保育者、です。子どもと共に笑い泣き、子どもから励まされ叱られ、自らを振り返り精いっぱい工夫を続けていく、こうした経験の積み重ね、あゆみの先に自分が目指す保育者としての力がついてくるのであろうと思えます。この二年間で学んだことをもとに、自分が目指す保育者像に向かい、子どもともに、保護者と一緒になって進んでいっていただきたいと願っています。

最後に申し上げたいことは、保育者の前に良き社会人として、地域社会の一員として、ともに同じ社会に生きている人々と、ともに well being に生きていてほしいと思えます。私の前にいる人も、後ろにいる人、横に座っている人も全て私にとって、私が生きていくために必要な人です。共に支え合い、助け合い、あなたがいるから私は well being に生きていられる、大事な人です。同時にあなたにとっても私が同じ

よう人間でありたいと願っています。

そして最後の最後に さようなら どうか自分を生き抜いてほしいと心から祈っています。

以上、学長としての式辞とします。

令和3年3月15日

新潟中央短期大学 学長 石 本 勝 見